

漁村住宅の建築的構成の変化と日常生活における部屋の使われ方からみた その要因（滋賀県近江八幡市沖之島町を例にして）

大阪工業大

塩谷寿翁

目的：標題の集落を対象に、①漁村住宅の建築的構成と部屋の使われ方との昭和30年代の前半から50年代の前半に亘る時期の前後における変容動向、と ②それに関与する生活的条件、とを事例的に解明しようとする⁽¹⁾。方法：小稿では実態調査⁽²⁾の結果を基に、①間取りの展開と住宅各部の建築的構成の変化を把握し、②その要因を主として日常生活（家庭生活・日常的接客生活など）における部屋の使われ方の変容の動向から追及する⁽³⁾。結果の要約：漁業生産の生活で要求される基本的な空間（部屋などの）機能は著しく変化せず、日常的な生活の変容に対応する建築更新がそれに矛盾しない限度で進行している。それは、①部屋部分の拡大による個人一夫婦生活に対応した空間形成、②家庭生活と日常的な接客生活を場的に分離する変化など、「原型」⁽⁴⁾にみられる部屋などの機能が変容しつつ空間的に分離・移行する傾向として説明できる。しかしながら概括的に部屋などの使われ方は大きく変化せず、部屋などの基本的な機能は継承されている。また、炊事空間などの付属部分の改変によっても平面の構成は著しく変化していない。

- (1) 本研究の一部は拙稿「漁村住宅の建築的構成と住生活の変容に関する研究——この20年における琵琶湖沖之島の漁業集落の場合——」『日本建築学会論文報告集』第302号 昭和56年4月P P 129～143、として公表した。
- (2) 滋賀県近江八幡市沖之島町の全漁村住宅を対象に昭和33年・昭和52年に実施（昭和52年の調査では対象154戸のうち80戸の住宅の建築的構成と住まい方を調査し、64戸について33年からの年次的变化を把握した）。
- (3) (2)の実態調査時に非日常生活の諸過程における生活のされ方についての資料を採取していないので、日常的な生活過程に限定した分析となっている。
- (4) 昭和20年代において示される標準的とみられる島の漁村住宅の間取り形式。